
死神より人間になりたい。

挑戦者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神より人間になりたい。

【Nコード】

N9919A

【作者名】

挑戦者

【あらすじ】

死神と人間の混血種の高三の俺。死神としての天才の俺に親爺は期待する。そんな親爺の期待は無視して俺は高校生活をエンジョイする。友達に部活に恋愛。俺は死神になんかならない。人間になりたいんだ……。醜くて残酷で、それ異常に美しい、人間に……。

プロローグ1 死神試験（前書き）

ハジメマシテ。小説書くのは二回目ですが、一回目は未完で終わつたので今作は頑張りまーす。ヒマ潰しにどーぞー。

プロローグ1 死神試験

東京。某所。深夜。

「今日は五人もか。」

口にも出したくなるさ。今夜、五人死ぬ。まったく。テンションが下がる。ビルの屋上から屋上へ飛ぶ足並みが重くなる。

「馬鹿息子が。仕事が増えて文句を言う奴がいるか。」

親爺が俺よりも高く飛びながら、いつも通りの小言を垂れる。俺が言わせてもらえば死神の家系に生まれたからって、死神にならなきゃならないなんてフェアじゃないだろ？俺にだってなりたいたいものが――。

「いいか純。十七の誕生日から十一ヵ月過ぎた。父さんが付き添うのは今夜が最後だ。五人程度、逝かすぐらい一人でできなくては死神として一人前にはなれないからな。見事クリアーしてみろ。」

：おいおい？

五人同時昇天なんてBクラスの死神ぐらいしかできないぞ？期待しすぎだろ？

てか親爺。明日の中間試験の事なんかキレイサッパリ忘れてやがるな？ったく、内申落ちたら親爺のせいだからな。

「純。死神ルール。」

第一問題ってことか？ いやいや。空を駆けながら答えることか？

「其之一。魂を私的に刈るな。其之二。同業者と争うな。其之三。餌と深く関わるな。三つのルール、破りし者は地獄へ戻る。」

余裕だ。親爺の口元が緩む。こんなんで喜ぶなよ。

「純よ。死神はこのルールを覚えることから始めるが…」

「このルールが全てだ、だろ？ 耳にタコだ。」

親爺の口元がさらに緩む。まったく。厳しいのか甘いのか、どっちかにしてくれよ。

ビルを駆け続け、やがてマンションの屋上に辿り着く。ここで俺は足を止める。嗅覚に神経を集中。鋭くする。甘美な甘い蜜の香り——〈魂〉の香りだ。

「このマンションの…そうだな。二階の一番奥の部屋だ。」

親爺の奴、ついに歯まで見せて笑いやがった。俺達はいくら姿を消しているとはいえ、声までは消せないんだぞ？ 俺の仕事ぶりを見ても、頼むから現場で声なんか洩らすなよ？

——さあ、始めるか。さっさと終わらせて少しはテスト勉強しな

き
や
な。

プロローグ2 試験合格。

透過能力を使い、マンションの屋上から一気に部屋の中まで降りる。俺はこのコンクリートを通り抜ける感触――肌にとわりつくザラザラした感触がどうにも慣れない。

この部屋か――。五人死ぬ？四人じゃないのか？

十畳ほどの寝室。明かりはなく、完全な暗闇。
ま、俺ら死神の瞳に影響はないけどな。

布団が五つ、キレイに横に並んでいる。
そこにすでに死体と化した〈肉〉が四体。
四体は家族か？両親に息子に娘か。首を何回も包丁で突き刺されて
いる。

なんでわかるかって？

そりゃあ枕元に男が包丁を手にとってるからさ。返り血を浴びて真っ赤に染まってやがる。

しかし何故この家族は何の抵抗もしなかったんだ？
俺は周囲が全く荒らされていないのを不可思議に思う。

ふとタンスの上の何個かの写真立てに目がいく。写真には家族五人の幸せそうな姿が写し出されている。

――五人。

俺が気が付くと同時に枕元の男が呟いた。

「ようやく家族から解放された…。」

そう言って男は自らの喉を切り裂いた。鮮血が俺の体を透き通る。

男の自殺と家族の死。

合点が着いた。この男は家族の一員だ。

さすが人間。人間ぐらいだろう？これだけ狂ってる種族。同族同士で残忍に殺し合う種族なんてさ。

親爺が俺に視線を送る。わかってるよ。状況分析なんか必要ない、
だろ？仕事に移るさ。

死体の口から青白い煙が出てる。煙の頂点には赤い玉がある。この
赤い玉が所謂、〈魂〉ってやつだ。

俺は懷から小さな鎌を出す。初めは死神に鎌だなんてベタすぎると
思ったけど、そこら辺は死神達のこだわりで変わることはなかった
らしい。

けど死神も鎌の利便性を考えたのか懷に納まるくらいの最少化、軽
量化をはかった。こだわってんだか、流されてるんだかわからねえ。

死神の仕事。

それは〈肉〉から出る青白い煙から、〈魂〉を切り離すこと。

死とは〈肉〉の器から〈魂〉が抜けること。

だが死んだとしても〈魂〉は〈肉〉から離れず、青白い煙に支えられて風船の様にプカプカ浮く。

それを切り離すのが死神の仕事ってわけさ。

様々な事情で刈りきれない〈魂〉が在ると、〈魂〉と青白い煙が繋がったまま〈肉〉から離れる。これが浮遊霊や地縛霊ってやつさ。

〈魂〉を切り離すのはクールかつスマートに行なわなきゃならない。〈魂〉は繊細なんだ。傷つけば死後の世界に行けなくなり、浮遊霊になりうる。それに傷つけばこちらの報酬がガタ落ちするからな。言うだろ？地獄の沙汰も金次第——。死神だってそうさ。

この五つの〈魂〉を傷つければ俺は死神にはならない——。

頭のどこかでそんな考えも浮かんだが、偽善者の俺はエゴを通せない。

人間らしいだろ？

俺は鎌で手早く青白い煙と赤い〈魂〉を切り離す。

すると五つの〈魂〉は天の昇る。雲の切れ目に〈魂〉が消えていった。

何のイレギュラーもなく俺は仕事を完遂した。

「さすが俺の息子だ。一発合格だ。」

仕事が終わると同時に親爺が口を開いた。

「お前は間違いなく死神の歴史に残る天才になる。俺はお前を誇りに思うぞ。」

はいはい。

——うんざりだ。

俺は死神にはならない。

純粋な死神じゃないんだから道を選ぶ権利はあるはずだ。

ま、今はとにかく、早く家に帰って中間試験の勉強だな。

第一話 父と母。

「いやー母さんにも見せてやりたかったよ。昨日の純は本当に凄かったよ。一般の死神はFクラスから始まるんだよ？純はすでにBクラスの実力だ。」

親爺が新聞を見ながら母さんに語る。新聞の一面は昨夜の一家心中（？）だ。親爺はそれを読みながら、これでもかってくらいの笑顔を見せる。

「はいはい。その話は昨日聞きましたよ。私が寝てるのを起こして熱く語ったでしょ。それより新聞を読みながら朝食食べるの止めて下さいってば。」

母さんは食器を洗ってるから背を向けているけど、きつと笑顔だ。親爺はおとなしく新聞をテーブルに置き、コーヒーを飲む。

俺はパンと目玉焼きを口に急いでほおりこむ。

「純。そんな無理して高校なんか通わないでいいんだぞ？お前には輝かしい死神の世界が――」

カチャ。

母さんが食器を洗うのを止めた。親爺ー。いくらご機嫌でも母さんの前でその話は止めとけよ。背を向けてるけど今の母さんは眉間にシワが寄っているに違いない。

「――あなた。その話も止めて下さいって言いましたよね？純には高校までは絶対に通わせませう。結婚前に言いましたよね？高校卒業するまで、子供には両方の道を歩ませる。卒業後に死神として生きるか、人間として生きるか選ばせるって。」

ほらー。母さん、熱くなっちゃったじゃんか。朝からめんどくせーなあ。

親爺は空気に堪えきれず、新聞で顔を隠す。そして小さな声で、そうだったな、って言った。

「ごちそーさま。」

朝からこんな話は聞きたくないね。さっさと学校行くか。

「――純。ちょっといい？」

母さんがエプロンで手を拭きながら小走りで、玄関で靴を履く俺に声をかけてきた。

「また父さんにお小遣いせびったわね？」

――ああ、やっぱり母さんにはバレますか。

俺は苦笑いしながら答える。

「バッシュが壊れてさ。最後の夏なんだ。ごめん。」

母さんは小さく溜め息する。でも笑顔だ。

「バッシュ買ってもらうかわりに死神認定試験を受けたわけね？」

俺は小さく頷く。

「しようないわね。あまり父さんに期待させるんじゃないわよ？」

「わかったよ。」

そう言うと、母さんの顔がみるみるうちに悪戯する顔になってきた。効果音をつけるとしたらへニヤニヤだ。

——やべえ。まじかよ？それも——

「彼女の前で見栄張りたいのはわかるけど、高校生なんだから割勘にしないさい。」

——知ってるのね。まじで母さんの前じゃあ、俺は丸裸です。

やっぱりすげえな、人間って。

どうせバレてるだろうけど、顔が真っ赤なのを見せたくないの、俺は急いで靴を履き、家を出た。

母さんは俺が死神の道を選ばないのを知っている。人間に憧れているのを知っているんだ。別に口にしたわけじゃあないけどね。

んで親爺は知らないわけ。親爺には悪いけど、死神になる気はサラサラないわけさ。

俺はそんな事を考えながら真夏日の道を歩く。中間試験の勉強はほぼできてなかったため、非常に足が重い。

でも俺はご機嫌なのさ。

だって学校にはあいつらがいるから――。俺が人間の中で一番好きなやつらさ。

第二話 直樹と美貴。

「じゅーんちゃーん。」

——この声。

「あれー？耳でも遠くなったのかなー？」

間違いない。おいおい、まじかよ？朝っぱらから勘弁してくれ。

そんな俺の淡い希望なんか無視して、あいつは俺の肩に腕を回してきた。そして耳元で呟いた。

「昨夜の認定試験はどうだったわけー？」

ああ、気分が悪くなる。こいつの声はまるで蛇が、体中を這いずり回るみたいな感覚。払っても離れない蚊みたいだ。

「なんとか合格できたよ。」

そう言うとかバカにした感じで、ヒュウーと口笛を鳴らす。

「人間と死神の混血のくせにやるねー。さすが純ちゃん！俺が王になったあかつきには、親衛隊長にしてあげるねー。」

言動の端々に嫌味を入れてくる。本当、こいつは気に食わない。

こいつの名は榊直樹。直樹も死神だ。俺と違って純血の死神。この

学校で唯一、俺の正体を知っている。タチが悪いことに直樹は王族だ。王族の道楽で人間の学校に通ってる。

長身で程よい具合の筋肉。金髪で口と鼻と舌にピアス。耳のピアスは数えきれない。

こんな奴だが、人間の女にはえらくモテる。人間も死神も女ってのはバカが多いな。

「そーいえばーバスケ部はインターハイ行けそうなのー？これが最後のチャンスじゃーん。純ちゃんも変なこだわり持たないで、死神の力使っちゃえばいいのにー。そうすれば俺のサッカー部みたいに全国優勝なんか余裕よー？」

今の発言に腹が立つこと。

一、死神が人間の高校で力を使うな。人間達の努力なんて死神が生まれ持つ才能に勝てるわけがない。

二、〈俺の〉じゃねーだろ。何様だよ。あ、王子様か。

三、てめえみたいな糞カスがバスケ部の事を話すな。

死神だけど人間に近い俺は感情を隠すのがうまい。腸が煮え繰り返るほど、ブチキレそうになるが堪えるとしよう。

「今年こそインターハイに行けそうだよ。っていうか行く。直樹は今年も全国制覇間違いないな。」

——どうだい？嘘がうまいだろ？人間っぽいだろ？

「純ちゃんありがとね！」

そう言うとき直樹は笑顔で校門に向けて走って行った。けど五歩程行くと戻ってきやがった。なんだよ？まだ話があるのか？

「じゅーんちゃーん。嘘をつく時は握り拳はよくないよ？そんな反抗的な態度を王子である俺にしちゃうわけ？親爺にチクるよ？」

――しまった。俺は慌てて拳を開く。言われた通り俺は拳を握っていた。手の平が汗だくになるほど。

失敗したか。でも、失敗なんかよくあることさ。

俺は人間なんだから。

直樹は笑顔のままだった。しかし、敵意を剥き出しにしてきた。静かに死神の力を解放してきている。こいつ――。やる気か？まずい。今、手を出されたら反撃できない――。

「じゅーん！」

俺の背後から甲高い声が聞こえる。こんな朝っぱらからテンションの高い人間はあいつしかいない。

俺はさらにめんどくさい事態に発展することを直感した。

「おはよう、美貴ちゃん。」

直樹は俺に話すより、さらに気味の悪い声を出す。人間の女達は、こんな声が好きらしい。美貴を除いては。

「あ、おはよう直樹君。純も、おはよう！」

美貴は真夏の太陽よりも眩しいくらいの笑顔を見せている。ちなみにこれは臭い比喻ではない。朝一から真夏の太陽より眩しい笑顔を見せられてみな？ けっこーしんどいぜ？

「純はちゃんと勉強した？ 美貴は全然してないよー。勉強嫌いだしー。どーしよー。てか試験当日に日直ってどう思う？ ひどくない？ これじゃあ勉強できないよー！ それにさあ…」

……このように美貴は朝一からテンションが高い。勉強の下りの矛盾とか、質問しているのに答えを聞かない、などは一切気にしない。俺は美貴がへこんでいたり、泣いていたりする姿を見たことがない。俺が知る人間で一番元気な人間だ。

「…でね。もう大変だったんだよー！ あ、そういえば新しいバツシユ買いに行くの今日だよね？ じゃあ部活終わるころに校門で待ってるから！」

五分程、マシンガンのように話した美貴は俺の予定を勝手に組んで笑顔で走っていった。ちなみに俺は先程の一言以外、話していない。ちなみに直樹ですら会話に口を挟めない。マシンガンで撃たれ続けたからさ。十メートルほど走ると美貴が振り向いた。そして口を両手で覆い、大きな声でこう言った。

「久しぶりのデートだねー！！」

そう言うとき美貴は真夏の太陽より眩しい笑顔で走っていった。さっきの笑顔と違うのは頬が赤いこと。

人間ってやつは恥ずかしがるくせに、こんな事を大声で言うから不思議だ。

——違うか。こんな恥ずかしいことをできるのは美貴だけか。

だから好きなんだけどな。

ちなみに俺の彼女です。

「純ちゃんの彼女って、まじいい女だよねー。犯りたいわー。」

——ふざけるな？

俺の中で抑えていた怒りが今にも爆発しそうになる。拳を固めることに躊躇いはない。怒りと共に死神の力が解放されていく——。

「んんー？純ちゃんやる気なの？いいのー？また純ちゃんのパパの給料下げちゃうよ？」

ハッ、と我に帰る。そうだ。これ以上、親爺に迷惑はかけられない。くだらない挑発に乗るな。怒りに身をまかせるな。——俺は人間なんだ。ヘラヘラ笑ってやり過ごせ。

「本当、純ちゃんは可愛いね。冗談を真にうけちゃってさ。いつか純ちゃんとも犯りたいよ。」

背筋が凍る。こいつは真性の変態だ。わかってた。こいつは俺のケツを狙ってやがる。美貴のことは冗談にしても、今の言葉はマジだ。

「ま、ともかく認定試験合格おめでと！人間の試験も頑張れよー！」
そう言って直樹は校舎に入っていた。まったく、純粹な死神が人間の高校に通うなよ。王族の道楽にはついていけねー。俺と直樹はクラスは違うから授業中は顔を見合わせることはない。けど美貴と直樹が同じクラスなんだ。心配だ。ああー心配だ。

今日は朝っぱらからついてねーや。しかもこの後、試験かよ。

今日は辛い一日になりそうだ。

第三話 雄司。

試験終了のチャイムが鳴る。

やっちゃったー！

そりゃあできるわけじゃないですよ。明け方まで街中駈け回って、魂刈ってたんだぜ？人間の能力じゃあ、こんぐらいが限界さ。

「その様子だと散々だったみたいだな？」

さすが長年のツレ。俺の顔見て結果わかるか。

「わかりきってたことだろ？そんなことより早く練習行くぞ。」

そんなことより？さすがバスケ馬鹿。あの結果じゃ俺だって人並にへこむぜ？

そんな俺の心情など毛程も気にしない男。それが雄司だ。バッシュが壊れたのも知っているのに関係ないみたい。

試験終了後から約五分。俺は体育館にいた。雄司に連れられ、あれよあれよと練習着になっていた。

「練習時間までまだあるな。」

そう言って雄司は俺にパスをした。俺は胸の前でキャッチ。雄司を見ると足腰を落とし、両手を広げていた。

「これが目的かい？」

俺はそう言うのとドリブルを始めた。雄司の表情がみるみる内に歓喜していく。まるで玩具を見る子供だ。

こうして一対一が始まった。

俺は人間と競い合う時に、死神の能力は絶対に使わない。直樹の様に人間にバレないくらいの力を使うこともできるけどな。けど、フエアじゃない。そうだろう？

それに俺は人間の努力つてもんを尊敬している。親爺や直樹には理解できないだろうな。

先の見えない鍛練の毎日。

やがて訪れる、成長の兆し。

だが、さらに現実には上がいる。

報われるとは限らない。

けれども続ける。

日々、鍛練。

続けた者でも成功は保証されない。

けど成功した者は必ず、努力をしているんだ。

俺は誰よりも努力をしている人間を知っている。今、目の前で最高の笑顔を見せている男だ。

雄司は努力の天才。そう言っても何ら差し支えない。

雄司はインターハイに出場していないにも関わらず、次の五輪の日本代表の候補に挙げられている。すでにプロチームからもオファーを受けている逸材だ。

俺は雄司を尊敬し、雄司を目標としている。バスケットを通じて互いを高めあっている。

膨大な努力と、ほんの少しの才能で俺達はバスケット部を引っ張ってきた。けど、いかにせん他のメンバーはついてこれない。バスケットは団体競技だからな。だが、そこに最高の喜びがあるんだ。

俺達の最後の夏。後輩達も育ってきた。今年こそ。今年こそインターハイに出る。そして全国制覇。それが俺と雄司の想い。そして夢だ。

「これで俺の二百五十連勝だな。」

雄司がリングを手で掴みながら俺に言う。俺はといえば、雄司の強烈のダンクを止められず、吹っ飛ばされていた。

俺はまだ雄司に勝てないでいる。俺だって県のベストファイブに選ばれているのに。

俺のもう一つの夢。

誰よりも、尊敬している、雄司を越える事。

「もう一戦だ。」

俺は雄司にパスをした。だが雄司はボールをコート外に放った。

「残念だな。もう時間だ。いつの間にか客も入ってきてるし、練習に移るか。」

雄司が放ったボールを後輩の一人がキャッチしていた。気が付くと周りには後輩達が集まっていた。後輩達は俺達の勝負を魅入ったようだ。

「なーに見てんだよ。練習始めるぞ！」

雄司の一声で俺達は練習を開始した。

第四話 エゴと正体。

夕方――。

定時になって、一日の練習がようやく終わった。今日も全身から汗を滝の様に吹き出した。へたれ込む様に俺はコートに寝そべった。

「雄司。今年こそ、インターハイに行くぞ。」

俺と対をなすように寝そべっている雄司。

「ああ。インターハイには行ける。間違いなく。」

雄司の返答は何か素っ気ない。疲れからきてる訳じゃない。

「全国制覇はまだ遠いか？後輩達もかなりの戦力になってきた。何せ、俺達の練習は地獄だからな。まだ遠いか？」

「――いや。後輩達はこれ以上なくらい成長してきている。問題はない。」

「はあ？じゃあ、あとは何が足りないんだよ？」

少し間が入った。そして雄司の口調はいつになく真剣になり、こう言った。

「足りないところは、お前だよ。純。」

――俺？

俺の何が足りない？雄司レベルにはいかないが、全国の奴らと対等に渡り合える自信はあるのに。

「俺の何が足りないってんだ？」

俺は体を起こし、少し熱くなり聞いた。熱くもなる。誰よりも、何よりも、雄司に言われたくなかった。想いは、夢は、同じだからだ。

「純。お前にはエゴが足りない。」

――エゴ？

「お前には自分を貫き通すエゴを感じられないんだ。コート上の敵は全て蹴散らす。極端に言えば、仲間に頼らず、自分一人で勝つ。ゴールは全て自分が決める。そんな気概や気合いが感じられない。――だから、俺には勝てないんだ。」

エゴ、か。人間の我儘だろ？自分の為に、自分の為に。確かに、どこかで俺は雄司の為に、って気持ちがあるのかもしれない。それに雄司はコートの上で完全にエゴイストだ。

痛いところを突くな。つまりは〈人間らしさ〉が足りないって事か。

「――純。まだある。俺が知らないとも思っているのか？」

雄司も起き上がり、俺の目を見つめて言った。この目はマジだ。

「何のことだよ？」

深い間を入れて、雄司は神妙な顔で、こう言った。

「お前、本気出してないだろ？」

――！

何だって？まさか。わかるわけがない。人間に気が付かれる訳がない。

「ガキの頃からの付き合いだ。俺にはわかるんだよ。純はいつだってマジだ。それは間違いない。だけど俺は知ってるぜ？お前が――。あ――、何て言ったら表現できるかわからないけど――」

雄司は汗だくの髪の毛を掻きながら言った。

「――何て言うか、人間離れた力？みたいな、火事場の馬鹿力的な、すげー力があるの知ってるんだ。」

まじかよ？核心は突いてないが、的は射ている。人間、ってか、雄

司は本当にすごい男だ。

だけどバレる訳にはいかないんだ。

「馬鹿な事言ってるじゃねえよ？俺は何か？化け物みたいな力を持つてるとでも言いたいのか？」

「違うよ。俺も何て言ったらいいかわからないんだ。何て言うか、お前は潜在能力ってもんをまだ引き出してないんだよ。」

俺は立ち上がり、先程とは逆に冷めて答えた。

「くだらねー。前半は納得できたが、後半はまじで理解できねえよ。」

俺はそう言って出口に向かって歩いた。

「待てよ、純！話はまだ終わって——」

「じゅーん！遅いよー！？レディを待たせすぎじゃない！」

美貴だ。ナイスタイミングだ。

「あ、雄司君！お疲れ様！」

美貴はいつも通りの最高の笑顔で雄司を労う。美貴が入ってくると、熱い話なんかできやしない。皆、美貴のペースにはまるからだ。

「雄司、話はここまでだ。これからバッシュ買いに行くから、また明日な。」

そう言って俺は体育館を出た。美貴は俺に置いていかれない様に小走りでついてくる。

「――純――!!」

雄司が今までにないくらいに声を荒げた。だが、俺は歩みを止めない。

「《約束》忘れたのか!? 俺が諦めたのを忘れたのか!?」

その言葉を言われたら、答えない訳にはいかない。男と、男の、《約束》だからだ。

「――忘れてる訳ねーだろうが!!」

その言葉を聞くと、雄司はいつもの顔に戻った。

「また、明日な。」

雄司のその言葉で、俺もいつもの顔に戻った。小さく手を上げて、俺は歩き始めた。

「なに――? 青春っばいすな! 美貴も入れてよー!」

……台無しだ。まあ仕方ない。美貴だし。

「じゃあなゆうじー！」

美貴が男口調で言った。

——きっと雄司は俺には見せない、優しい笑顔をしているに違いない。

でも俺は、その笑顔は見れないんだ。

だから振り返らず、歩いて行った。

第五話 デート後に。

なんとか日付が変わる前に家に着いた。俺の買い物は三十分程で終わったが、そこからが長かった。

「よし！じゃあ今日はあの雲を追い掛けようー！」

さすが美貴。その発言はまさにファンタジスタ。予測がつかなかった。俺達はひたすら雲を追い掛けた。日が暮れても月明かりで追い掛けた。

楽しかった。いつも美貴に振り回されてばかりだが、俺とあいつはそれを楽しみ、喜び、惚れていたんだ。

さすがに雲を見失う時間になると俺は美貴を家に送った。

そして美貴の家の下で何時も通りにキスをした。

美貴の照れた笑顔が一段と可愛かった。美貴の恥じらう表情を独占している。幸せだ。

「純。こっちに来い。」

親爺の声で現実に戻った。靴を脱ぎ、自分の部屋に向かう俺を親爺が呼んだ。せっかく幸せの余韻に浸っているのに、何だってんだ？

「また、直樹様に齒向かったのか？」

——直樹の野郎。大王にチクリ入れやがったな。

「まったく。何度言わせたらわかるのだ？直樹様は高貴な方。その身分に慢らず人間共の世界を学んでいる勤勉な方だぞ。いずれ、お前はあの方の下で働く。これ以上問題を起こさないでくれ。」

いいや。あいつはそんな賢者ではない。確実に愚者の部類だ。弱い人間の前で力を使い、下卑た優越感に浸る糞野郎だ。もしくは人間の女とやりたいだけさ。

「わかったよ。少し感情的になっただけさ。明日、謝罪しとく。」
心にもないことを言った。

俺はこれ以上親爺に迷惑はかけられない。自分の屈辱なんて、親爺の味わった屈辱に比べれば、豆みたいなもんだ。

「……それだけか？」

親爺が言った。何かを含むような言い方で。

どうやら、面倒くさいことになりそうだ。

「わかったよ。仕事だろ？今日は何個だ？」

親爺の口角が上がる。親爺の狙い通りに動かせたからだろうな。

親爺は立ち上がり、電話が置いてある棚に歩いた。棚から一冊のノートを取り、俺に投げた。俺は手に取り、表紙に目をやる。

〈回覧板〉

俺は深く溜め息をつく。だって回覧板だぜ？そりゃあーご近所の死神達から回ってくるけど、もう少し他に適切な表現なかったのかよ？人間の人生の最後が、こんなノートに書かれてちゃあ、人間も不憫すぎないかい？

俺は回覧板を開いた。

最初のページは他愛もない挨拶だ。また溜め息をつきたくなった。

次のページから今月、死ぬ人間がリストアップされている。

日時。場所。個数が表記されている。名前は書かれていない。必要性がないからな。

死神達には必要がないからだけだが、俺にとってはありがたい話だ。名前なんて表記されていたら俺は気が狂う。

次、俺達の領域で死ぬ人間は一つだけのようだ。

明日。午後一時。場所は家から十分程の大きな道路だ。

まいったな。学校を抜け出すことになりそうだ。母さんがこの場にいたら話はなくなっていただろうに。母さんがいない時にこの話を持ちかけたのは狙ったな？

「純。明日は一人でこなしてこい。お前はもう死神なんだからな。」

心で深い溜め息をつく。

まあいい。借りは借りだ。自ら蒔いた種ぐらい、自ら刈るさ。

仕事を早くすませて、部活に間に合えばいいさ。

第六話 死神になりたくない理由。

翌日。昼休み。天候は曇り。

俺は学校を抜け出して、家の近くの大通りに来ていた。抜け出すのは楽勝だった。透過能力を使って消えればいいだけだからな。だけど、早く済ませないとクラスの連中や先生が心配する。急ぎたいところだ。

今の時刻は十二時五十分。

回覧板には一時と書かれていたが、それは正確ではない。約十分程前後する。死神といえど、全ての運命を司ることはできないからだ。しかし、死の運命から逃れられることはない。確実に訪れるのだ。

大通りが赤に変わる。

歩行者が大通りを歩きだす。

女性。制服だ。

——なんてことだ。あの制服は見覚えがある。あれはつい先程まで見ていた制服と同じだ。

すると大型のトラックが猛スピードで赤信号に向かってくる。

俺の人間の心が疼いた。偽善の心が疼いた。

それよりも早く、激しいブレーキ音が鳴る。それと同時に、女が芯を無くした人形の様に吹っ飛んだ。

それでもトラックの勢いは止まらない。女は前輪に巻き込まれ、後輪に踏み潰された。

即死だ。

悲鳴と喧騒が聞こえ始めた。

——だから、俺は死神になんかなりたくない。

人の死に慣れる事はない。

救いたいという偽善が消える事はない。

この感情がある限り、絶対に、死神になりたくないんだ。

回覧板には死の予定時間と場所しか書かれていないのは、この最悪の仕事で、僅かな救いだった。

もし、人間の名前が書かれていたら。もし、それが俺の知っている人間だったら——。

思考を止めた。意味がない。

いや、恐いんだ。

考えることを拒絶したいだけか。

肉の器から赤い魂がはみ出した。とにかく今は魂の回収だけを考えろ。せめてあの世で幸せに過ごせるように、魂は傷つけるな。

さっさと終わらせて、学校に戻ろう。

第七話 苦悩する偽善者。

『ねー、パパ。なんで死ぬ人を助けちゃいけないの？』

『それはな、人間って生き物には分相応の生が、定められているからだよ。』

俺は首をかしげる。よく意味がわからない。

『純には少し難しすぎたかな？純が大きくなればわかるさ。』

親爺は笑顔で俺の頭を撫でる。大きな、大きな、手だ。

『こう言えばわかるかな。人間達の好きな言葉だよ。運命ってやつさ。』

『うんめい？』

『そう。人間達は運命と呼んで逃避しているけど、必然なことなんだ。』

『んー。よくわからないけど、じゃあ助けたらどうなるの？』

親爺はまた微笑む。

『大きな大きなビルの、一階の一部屋を崩したらどうなると思う？』

俺は少し考えた。答えがわかり得意げに言った。

『ビル倒れちゃう!』

親爺はさらに微笑む。また頭を撫でてくれた。

『そういうことだよ。』

――目を覚ます。辺りを見回す。先生が朗読している。友達がそれを聞いていた。そうだ。今は学校だ。眠気に襲われ寝てたんだ。

夢か。なんで今更、昔の夢なんか見るんだ？

いや、わかってる。夢を見た理由はわかっている。

俺は十七から死神の仕事をこなしてきた。死神の仕事をこなす内に、心の深層で思い続けていたことがあった。それは始めは小さな小さな思いだった。けど、それは少しずつ、確実に大きくなってきている。

人間を救いたい。

天寿を全うするならいい。事故や殺人は納得できないんだ。

しかし、そんなことは現実問題、無理だ。

人間は愚かだし、救えない人間は確実に存在している。

救う人間。救わない人間。どうやって区別をする？俺にそんな判断を下す権利などない。それこそ神と呼ばれる存在にしか権利はない。それに救うとするなら、一部の、自分の領域範囲の人間のみになる。回覧板には自分の領域範囲の死しか書かれていないからだ。そんな不公平が許されるのか？

親爺はビルの崩壊に例えたが、それは恐らく世界の崩壊と同一だろう。世界の崩壊が、どういう意味で、どういう現象が起きるかは正確には知らない。多分親爺も知らない。だって前例がないからな。わからないが、人間を救って、人間の世界を崩壊させては本末転倒だ。

こんな考えは偽善でしかない。救えない無力さを、自分に言い聞かせ、自己を取り繕っているにすぎないんだ。

こんな自分に反吐が出る。

だが、耐えられるのか？

母が。雄司が。

——美貴が。

「餌とは深く関わるな。」

親爺の声が聞こえた気がした。耳にタコが何匹もできるくらい聞いた言葉だ。刷り込まれるくらい繰り返された。

親爺の言った事がようやくわかった気がする。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

答えはでなかった。

第八話 悪質。

久々にへこんだ。部活に向かう足取りが重いのは、あれ以来二回目だ。

同じ学校の生徒の死。あの時間出歩いていることは一年だろう。

職員室が騒がしい。ようやく学校に連絡が届いたみたいだな。

——忘れよう。出ない答えに悩むことは無意味だ。そう言い聞かせて体育館に向かった。

「純ちゃん。お疲れえ。」

この薄気味悪い声。持ち主は一人しかいない。奴はまた、気安く肩に腕を回した。

「なーにへこんでるの？」

反吐が出そうな笑顔だ。何を期待してんだ？ 糞野郎。

「直樹には関係ないよ。わりい。俺急いでるから。」

そう言って腕を払おうとした。——が。ピクリとも動かない。首回りが少し圧迫される。首には直樹の腕が。しかし、それは人間の物とは考えられないほどの筋肉だった。野郎。死神の能力を解放しやがったな？

「純ちゃんは本当甘ちゃんだね。昼休みから抜けて仕事に行ったん

でしょ？だからへこんでるんですよー。」

直樹は耳のピアスをこすり合わせ、不快な金属音を鳴らした。俺がへこんでるのを見て楽しいか？

「直樹。わりいけど、まじで急いでるんだ。離してくれないか？」

直樹はそれでも離さない。俺の耳元で、舌のピアスを歯に当てて、虫酸が走る音色を響かせる。

「餌と深く関わるのはルール違反だよー？同じ学校の女が死んだくらいでへこんでたら身がもたないよ？」

悔しいが、直樹の言う通りだ。ルールを守らない俺のミスだ。だけど、俺は死神なんかじゃない。人間なんだ。ルールを守る必要なんかない。

——いや、待て。不可解な事。俺の中で、一つ疑問が生まれた。

「なんで直樹が同じ学校の女が死んだのを知っているんだ？俺と領域範囲は違うだろ？」

——ケケケッ。

悪寒が背筋を走った。体の毛穴が全て開いた気がした。

なんて、笑い声だ。さすがは死神。この声は地獄の住人ならではの、何故笑う？何かを含んだ笑いだ。馬鹿にした様な。仕組まれた様な。

——仕組まれた？

まさか。

「僕がパパに頼んだんだよ。僕の領域範囲に同じ高校の餌を見つけろ。それを純ちゃんに回収させてくれて。」

——この、糞野郎。抑え切れない激情が胸の蓋を叩く。溢れ出る。解放しろ——。死神の能力を。

『誠に申し訳ございませんでした！』

——親爺の声が聞こえた気がした。親爺が地面に頭をこすりつける姿が見えた気がした。そうだ。

二度と親爺に、あんな屈辱を味合わせるものか。誓った筈だ。堪える。堪えるんだ。

「そうだったんだ。勘弁してくれよ。」

無理に笑顔を作る。口の筋肉が痙攣している。無理がある顔だ。しかし止めない。笑顔を作れ。

「うふふ！よく我慢できたね。純ちゃん大人になっちゃったね！」

そう言うとき直樹は俺の頬に舌を這わせた。

「おいしく育ってきたねー。でもまだまだ。もっと熟した時にね！」

そう言うとき直樹は、からめた腕を離し去って行った。

頬が腐敗していく錯覚を覚える。毛穴は全開で、冷や汗が吹き出し
ている。背筋は凍ったままだ。

気分が悪い。

足取りはさらに重くなった。

第九話 神に祈る死神。

部活が終わった。

俺は体育館の外の水道に向かった。蛇口をひねり、喉の渴きを癒した。蛇口の下に頭を入れた。冷えた水が心地よかった。汗を洗い流してくれた。

このまま、俺の偽善の心も洗い流してくれ。

直樹に受けた屈辱を洗い流してくれ。

そんな事はあるわけない。くだらないな。俺は頭を抜いてタオルで顔を拭いた。

突然、ボールが足元に転がってきた。ボールを手に取り、振り向いた。

「そろそろ俺に勝ちたくないか？」

雄司か。まったく。なんて笑顔だよ。俺の為じゃなくて、バスケットがしたいだけだろ？ 本当バスケット馬鹿だな。

「今日こそ勝ってやるよ。」

俺はそう言って体育館に戻った。もう誰もいない。さすがに二人だと広く感じる。

雄司は足元でドリブルを始めた。相変わらず隙はない。腰も低く、左手がボールを守っている。雄司の視線は俺の目に定められている。鋭く、強い視線だ。

「純。今日のお前は絶対に勝てねえよ。」

その言葉と同時に鋭いドライブをしかけてきた。

速い。

一瞬にして俺を抜き去った。何時の間にこんな速くなった？止められる訳がない。そんな考えよりも速く、雄司は強烈なダークを決めていた。雄司はリングから手を離し、地に足を着けた。そしてすぐ振り向いた。その目は何か意味ありげな目だった。

「純。言っておくが、速くなったのは俺じゃない。お前の反応が鈍かったんだよ。」

雄司は転がるボールを片手で拾いあげた。そのままボールを指の先で回転させた。

「お前さ、どうせまた何かで悩んでるんだろ？面に出すぎだよ。」

回転を止める。俺にパスした。俺は片手で受ける。

「その悩みを聞き出すなんて野暮はしない。純が俺に相談してこないってことは、純自身の問題なんだろ？」

雄司は腰に手を回した。そしてそのまま歩いて出口に向かった。俺

の横を通り過ぎる前に、俺の肩に手を置いた。

「俺の知るお前は、強い男だ。そのお前が悩む事だ。かなりしんどいんだろ？けどな、俺の知るお前は、それすら乗り越える強い男だ。」

そう言って雄司は出口へ歩いて行った。俺はボールを手にしたまま動くことはなかった。

「純が腑抜けだと、張り合いがないんだよ！くだらねー悩みなんかさっさと解決しろ！明日も同じ面見せたら殴るからな！」

雄司が出口付近で叫んだだろう。俺は振り向く事はなかった。顔を見せられないから。今の俺はかなり情けない顔してるだろうからな。その代わり、右手を上げ、親指を立てた。

きつと雄司は鼻で笑っている。そして振り返って帰っていくんだろう。

俺は誰もいなくなった体育館でボールを持ってたたずんだ。

雄司は何時もそうだ。悩みなんか明かさなくても察してくれる。言い出しにくいことは聞き出してくれる。何もできない時は、俺の背中を押してくれる。

そうだ。俺は強い男だ。この問題は解決できない。けど自分の中で昇華しろ。

俺が親愛する人が、事故や殺人に巻き込まれる時、俺は一体どうする？

救いたい。

救いたい。

偽善だ。

他人は救わず、自分の親愛する人を救う。それは偽りの優しさだ。

俺にできる事。

祈るしかない。

親愛なる人達が、不幸な死に巻き込まれない事を祈るしかない。

それが、人間の当たり前の事だ。ごく普通の人間達は、この問題は考えていないさ。いや、考えないようにしているだけか。

親愛なる人達が死なない事を祈る。俺にはそれぐらいしかできない。

神よ――。

もし、いるならば、俺の願いを叶えろ。

俺は鼻で笑ってしまった。滑稽だから。半死神が、神に祈るなんて滑稽すぎるだろ？

俺は荷物をまとめて、体育館を出た。

——そういえば、神に祈ったのなんか始めてだな。

第十話 覚悟。(前書き)

連載を再開します。色々煮詰まりましたが、これからまた頑張りますのでお付き合い下さい。よろしくお願いします!!

第十話 覚悟。

通学路を下校した。何時もの帰り道を歩く。街路樹に青々とした葉。少ない街灯。空を見上げれば満天の星空と満月。見慣れた景色。落ち込んだ気持ちは消えることはないが、なんとか昇華できそうだ。時間が解決してくれる。足取りもさつきよりは軽い。景色を眺める余裕もあるからな。

その内、家が見えてきた。今日は早く寝よう。疲れた時は寝るに限る。ドアを開ける。

「仕事はどうだった？」

親爺が玄関に立っていた。俺の帰りを待ってたのか。

「楽勝だったよ。でも部活で疲れたから今日はメシはいいや。寝るよ。」

俺は靴を脱ぎ、親爺の横を通りすぎ階段に向かった。

「同じ高校の女だったらしいな。」

足が止まる。何故、親爺が知っている？ 回覧板には場所と時間と個数しか書かれていないのに。

「さつき、直樹様から電話を頂いた。純にルールを躰直せと申し付けられたよ。」

クソッ。あの野郎は俺をどこまで苦しめればいいんだ。

「純。直樹様は王族だ。逆らうことはできない。同業者と争うこともルール違反だ。」

わかってるよ。死神なんて糞食らえだし、親爺は理解してもそれに逆らわない律儀者だってこともな。

「――すまないな。」

え？どうした？親爺が俺に謝るなんて。珍しいにも程がある。俺は振り返り親爺を見る。

「直樹様はお前に異常な執着を持っていらっしゃる。あの時、お前が直樹様を殴って以来、それは限度を越え始めた。だが、それを止める力が父さんにはないんだ。」

親爺は下を向き、苦しんだ表情をしている。らしくねえよ。人間みたいだ。

「人間との混血はお前以外ないからな。珍種を見る目でお前を観察している。」

「大丈夫。直樹の性格は理解しているから。なんとかあしらうよ。親爺に迷惑はかけないさ。」

俺はそれだけ言って階段を登った。直樹への怒りが込み上げる。だが、親爺を思えば怒りは治まる。大丈夫。あしらえるさ。自分に言い聞かせる。

ふと、足が止まった。俺は何となく聞いてみたくなった。今の雰囲気なら親爺は答えてくれるかもしれない。淡い期待を抱いた。

「もし、もしもだよ？死ぬはずの人間を救ったらどうなるんだ？」

親爺は振り向き、俺を見る。目を鋭くする。眉間に皺も寄っている。――やべえ。怒らせたか？

「純。それだけは許されないことだ。それ以上でも、それ以下でもない。」

圧倒された。親爺のこんな顔は始めてだ。鋭い表情に、重い声が俺にのしかかった。俺は少なからず怖れを抱いてしまった。

「だが、答えよう。回収されるべき魂が現実存在する。その矛盾は現実世界に小さい亀裂を呼ぶ。回収されなかった魂が、人間と接触するだけで、多くの運命が変化する。回収されるべき魂が回収されなければ、死後の世界と現実の世界の境目が曖昧になるだろう。」

戦慄した。俺の軽はずみな偽善は、やはり世界を崩壊させるんだ。死後の世界と現実世界が入り交じる。死んだはずの人間が現実へ。現実にいる人間が死後へ。考えるだけで恐ろしくなる。混沌の世界だ。

だが、親爺はどうするんだ？聞きたい。親爺の答えを聞きたい。

「なら、親爺は母さんが死ぬとわかったらどうするんだ？」

親爺は相変わらず俺の目を見ている。だが、その目からは鋭さは消えた。変わりに、穏やかな目になっていた。口元も緩やかになる。そして、こう言った。

「母さんの魂は父さんが回収するさ。父さんは死神だからな。」

——覚悟が伝わった。きっと親爺は母さんを愛した時点で、逃れられない現実を覚悟している。それまで伝わった。

「やはり疲れているな。今日は早く寝なさい。」

そう言って親爺はリビングに行った。

今日は本当に疲れたよ。もう寝よう。考えるのも疲れるしな。

第十一話 時の執行者。

部屋の前に着く。巨大な扉の前に立つ。扉の前からも圧倒的なプレッシャーが私を襲う。この職に就き数百年。ライル様の威厳に慣れるという事はない。息を整える。鼓動を収める。だが、収まることはない。わかっていたことだ。扉をノックする。

「失礼します。」

「問題か？」

低く、くぐもった声。重い重圧が襲う。だが、仕事だ。報告しろ。

「これを御覧下さい。」

部下から渡された資料をライル様に渡す。何時もと変わらない魂の報告書。それに連なる報奨金。魂を回収する死神の名前。何時もと変わることはない。

最後のページを開く。

「ほう。ミラークの息子が回収しているではないか。順調に育っているようだ。一月に六つか。優秀だ。やはり混血は強いようだ。」

ライル様は次の資料に目を通す。来月の回収される魂。数万とある。全てを総括されている。

「要点は？」

「東京地区です。ミラークの地域です。」

ライル様はミラークの地域の資料を開く。

「――そうか。あれから十八年。思ったより早かったな。」

「ミラークに仕事をこなせるのでしょうか。」

ライル様の目が私を貫く。鼓動が高鳴る。

「カミュ。お主の杞憂に過ぎぬわ。ミラークは死神だ。それも優秀だ。必ず仕事をこなす。」

「失礼しました。親衛隊長として過剰な配慮でした。」

「許す。以上ならば下がれ。」

――ここからだ。本題は。

「もう一件ございます。ご子息様の事で。」

「アスーリか。何だ？ また餌との交配か？」

「餌との交配の際に避妊は必ずしているので問題ないですが。」

「ならば何だ？ 要点を話せ。」

苦しい。ライル様の重圧は圧倒的すぎる。死神の頂点に立つ御方の権威は私には強すぎる。

「失礼しました。アスーリ様はミラークの息子を地獄へ戻せと申し付けてきております。」

「理由は？」

「餌と深く関わっている様です。」

「表向きではない。真意を話せと言っている。」

「…はい。アスーリ様の嫉妬と執着からくるものです。ミラークの息子に非はないとの調べです。」

「ならば聞き流せ。監視は怠るな。」

「承知しました。」

急いで部屋を出る。長居は無用だ。報告は済ませた。問題はない。

気をやりすぎか。アスーリ様にも手を焼かされる。まあいい。全ては《時》が決める事。我々はその《執行者》に過ぎない。

誰もいない廊下から窓の外を眺める。暗い空。ぶ厚い雲が空を隈無く覆っている。この地には太陽の光は届かない。荒れた大地。緑が育つわけもないので荒涼としている。

私が立つ城には荘厳で華麗な装飾が施されている。死の神の頂点が座する城。地獄と現実世界を監視するかのように巨大にそびえ立つ。

それに連なるようにいくつもの建物が並び立つ。私達の仕事場だ。

ここは地獄。

死神達の暮らす世界。

第十二話 雄司の答え。

あれから二週間。インターハイまで残り一月を切った。

「違うだろ！今のワンドリブルはいらねえよ！ダイレクトで打て！」
キャプテンの怒号が体育館に響く。後輩は怖じけることなく、雄司の指示を聞く。間違いを理解したからだ。

「ディフェンスも簡単に打たせるな！常にプレッシャーを与えろ！」
俺も矢継ぎ早に指示を出す。俺達の高校には監督はいない。俺と雄司が作り上げたチームだ。

さすがに一月を切ると、練習も厳しさを増してきた。だが、手応えはある。厳しく指導すれば純粹に答えてくるチームだ。確かな手応えを感じていた。

部活終了のチャイムが鳴った。暫らくすると、二人きりになった。

ここからが俺の練習だ。毎日の日課。雄司との一対一。

「いい目になってきたな！」

雄司からボールを奪おうとディフェンスをする俺に言った。

「いつまで雄司に負けているわけにはいかねえよ！」

ボールを奪った。すぐさまドリブルを開始する。俺達の一対一は通

常のハーフコートじゃない。オールコートでやる。実戦に近い体力もつくからな。全力で走る。いける。跳び上がりレイアップをする。

「百年早え！」

雄司は後ろか跳んだ。だが、俺よりも高く跳び、レイアップを叩き落とした。

雄司はボールを奪いゴールに向う。速い。追いつけない。いや、雄司と俺のスピードはほぼ同じ。違うのは体力だ。練習後でも体力が衰えてない。雄司は無人のゴールにダンクを決めた。

「惜しかったが、また俺の勝ちだな。」

「卒業する前には勝つき。」

「楽しみにしてるよ。」

雄司はそう言ってバックからタオルを出した。汗だくの顔を拭く。俺はドリンクを取り、喉を潤す。

「純。この前の話、覚えてるか？」

「何の事だ？」

「あれだよ。純はまだ本気じゃないって話。」

ドリンクを飲むのを止める。雄司を見た。

「俺は今でもそう思っている。お前の目から、体から、俺にはない異質な力を感じる。前よりも強く、な。」

まだ諦めてないのか。死神だってバレる訳にはいかないんだ。吐く訳にはいかない。

「純が何かを隠しているのはわかってる。だけど明かさないって事は、それが答えなんだろう？」

俺は沈黙してしまった。雄司の言う通りだ。だけど認める事はできない。

「それが答えなら、俺はこれ以上詮索しないよ。それに俺の勘違いって線もあるしな。」

――プツ。

「ははははっ！何だよそれ！」

俺は爆笑してしまった。本当雄司は面白い。俺を本当に信頼しているんだな。嬉しいよ。

「まあ論理もガタガタだし、証拠もないけど、そう思うならそう思っ
ててくれよ。俺に本当にそんな力があればいいんだけどな。」

爆笑しているのがむかついたのか、雄司は俺の顔目がけてタオルを投げた。

「馬鹿にしがってー。まあいい。話はそれだけだよ。」

雄司も笑っていた。少し顔が赤い。雄司も論理がメチャクチャなのを理解してたんだろう。恥ずかしいんだろうな。

俺達は腹を抱え笑いあった。久々に笑った。腹がよじれるほどに。ここ何週間か少し沈んだ気持ちになったけど、一気に晴れた。

雄司の気持ちもわかるけどな。だけど俺は死神の能力は使わないよ。人間の力を研く。研いて人間達に勝つさ。そして夢を叶えてみせるさ。

第十三話 幸せの影に。

「最近、純元気だよねー。」

俺は部活帰りに美貴と下校していた。いつもの並木道を二人で手を繋いで歩いていった。だけど突然、何を言い出すんだい美貴？最近はずいぶん一緒に帰るのが日課になっていた。毎日一緒なのに急に何だよ？相変わらず予想外な美貴。意味がわからないから聞き返した。

「俺は最近元気なかったかい？」

美貴は握った俺の手を振りながら、何回も頷きながら答えた。

「純の事なら美貴は何でもわかるのだ！最近悩んでたでしょー？それで最近解決できた！でしょ？」

凶星だった。ったく。母さんと雄司に続いて、美貴にまで考えてることがバレてやがる。人間が凄いいんじゃないかって、単に俺がわかりやすいただけじゃないか？

「凄いな、美貴。大正解だよ。」

美貴は微笑む。手を離しスキップをして俺の数歩先を歩いた。ご機嫌だ。

「でしょー！それに気付いて毎日純に元気づけてたんだよ！美貴のおかげだね！」

……ん？やっぱ美貴は母さんや雄司までにはいかないな。何か大き

な勘違いをしている。

「あれー？美貴のおかげじゃないのー？」

美貴はスキップを止めて後ろ歩きになった。バックを両手で後ろに持ち、前屈みになって俺の顔を覗く。完全に勘違いしてる。けど面倒臭いし、美貴と一緒にいて元気になったのは事実だ。ここは嘘をつこう。

「美貴のおかげだよ。ありがとな。」

それを聞くと満面の笑みになった。そしてやっぱりスキップを始めた。

「えへへー。やっぱり美貴様は凄いね！」

まったく。可愛いな。俺も笑みがこぼれる。

「純ー。今、美貴のこと可愛いって思ったでしょー？」

え？顔も見えないのに何でわかった？美貴は俺の数歩先でスキップをしてるのに。ドキッとして、顔が赤くなった。

「あーやっぱりそうなんだ！純、顔赤くなってるし！」

美貴は振り向いて俺の顔をまじまじと見ていた。完全にからかつてやがる。くそっ。負けてられない。

「そうだよ。美貴を可愛いって思った。」

真剣な顔して言ってやった。恥ずかしいけどな。いつもおちやらけてる美貴だけど、こうやって恥ずかしい事を言うと――

「で、でしょ！やっぱば、そうだよね！」

絵に描いたように照れる。一瞬にして茹でダコみたく赤くなった。やっぱり可愛い奴だ。

気が付くと美貴の家の前だった。あつという間だ。俺達は何時ものようにキスをして抱き合った。

「私達、付き合ってもう三ヵ月だねー。」

俺の腕の中で美貴が言った。

「そうだね。早いもんだな。」

すると美貴は俺の胸に頭をこすりつけた。

「……………いないんだー。」

「え？何？聞こえないよ？」

すると美貴は俺の胸を叩いた。何回も。

「だからー！今週末、両親が旅行で誰もいないんだーって言ったの！バカ！」

……え？それって？美貴の顔を見ようとしたら美貴は俺の胸に顔をうずめていた。表情は何えなかった。でも、俺が想像している意味

に違いない。鼓動が高鳴る。息が苦しい――。

――ピリリリッ

携帯が鳴った。こういう時は出たほうがいいのか？無視するべきか？頭が混乱している。携帯は止まらない。

「出ていいよ？」

「え。あ、ああ。ちよつとごめんな。」

美貴を離して背を向ける。携帯を開く。親爺かよ。つたく。タイミング悪いな。

「――もしもしい？」

「純。今すぐ帰ってこい。」

「はぁ？なんだよ、いきなり。」

「いいから早く帰ってこんかつ!!」

親爺の怒号で反射的に携帯を耳元から離してしまった。何なんだ？激昂してんじゃないか。意味がわからない。一体何事だよ？でもただ事じゃない。尋常じゃない。これは従うしかない。

「……わかったよ。今すぐ帰る。」

そう言って携帯を切った。美貴を見る。心配そうだ。親爺の声は美貴にも聞こえたみたいだ。

「大丈夫??」

「俺にもよくわからないけど、とにかく帰るわ。悪いな。あ、あの話はまた今度な。」

「う、うん。気を付けてね。」

俺は美貴に別れを告げ、家に向かい走った。一体、何事なんだ？

第十四話 家族団欒。

息が切れた。本気で走った。とにかく走った。約五分で家に着いた。急いで扉を開ける。

「純。息を整えろ。そして何時もどおりにしている。」

——はあ？意味がわからねえよ。まじで何なんだよ。完全に俺の歸りを待ってたな。玄関までお出迎えかよ。

「純は理解なくていい。ただ、従え。」

親爺が俺を威圧する。圧倒的だ。何てプレッシャーだ。実の息子相手に何だってんだ？

「わかったよ。何時もどおりだね。」

俺は深く深呼吸する。二回、三回。息は整え始めた。

「よし。夕飯だ。冷える前にしっかり食べろよ。」

次は夕飯かい？もう何だっていい。真意はわからない。従うよ。

俺はリビングに向った。テーブルにはカレーライスが三つ並んでいた。

「あら、お帰り純。今日は早いじゃない。」

母さんがテーブルにサラダを置きながら話す。何時も変わらぬ風景

だ。親爺も席に座った。それを見て俺も座る。

「やっぱり食事は全員で食べなきゃね。」

母さんも笑顔で席に着いた。食事をする。家族団欒だ。何だよ。これが親爺の目的か？

他愛ない談笑が続いた。親爺も笑顔で会話している。先程の態度とはまさに豹変して。

――ふと、親爺に視線をやる。親爺は母さんを見ていた。その目は何故か、淋しそうな、悲しそうな目だった。だが、一瞬で笑顔に戻った。

一体何なんだよ。真意を知りたい。今の目は何なんだ？尋常じゃない態度は何なんだ？

「母さん。とても美味しかったよ。ごちそうさま。」

親爺が零れそうな笑顔で母さんに微笑んだ。

「何ですか、急にー。」

母さんが少し疑いながら親爺を見た。

「いや、本当にそう思っただけだよ。」

「あら、そうですか？褒めても何も出ませんからね。」

母さんは食器を片付け台所に向った。食器を洗っている。

「なあ親爺。一体何事なんだよ？そろそろ教えてくれよ。」

俺は小声で親爺に聞いた。

「母さんのメシは美味かったか？」

「え？あ、ああ。美味かったよ。」

「そうだろ？父さんの自慢なんだ。」

どうやら答える気はないみたいだな。もういいよ。諦めた。

俺と親爺は食後のコーヒーを飲んでいた。また、ふと親爺を見る。チラチラと、壁にかかる時計を見ていた。

——トウルルル

家の電話が鳴った。母さんが台所から小走りで来た。エプロンで手を拭いて電話に出る。

「——はい、もしもし。あら、高田さん？どうしたの？」

ご近所の高田さんからの電話だった。母さんは笑顔で話していた。

親爺はというと。テーブルの下で拳を固めていた。小刻みに震えて

いた。何なんだよ、まじで。

「あなた。ちょっと出掛けてきていいかしら？」

「ああ。また高田の旦那の愚痴かい？」

「そうなのよー。なるべく早く帰ってきますから。」

母さんはそう言って電話を切った。急いで身仕度を整え、玄関に向った。俺は親爺と二人きりになった。すると親爺は俺の耳元で呟いた。

「玄関に行くぞ。」

もう疑問にすら思わない。俺は親爺に従った。

玄関では母さんが靴を履いていた。

「あら、何よ。二人揃って。」

「別に何でもないよ。母さん。気を付けてな。」

親爺はまた母さんに微笑みかけた。

「いつてらっしゃーい。高田さんと仲良くね。」

俺も母さんに微笑んだ。

「何よー。ちょっとおかしいわよ？まあいけど。あ、食器は洗っておいたんで拭いといて下さいね。」

そう言って母さんは外へ出た。

親爺は母さんを見送ると、リビングに戻った。

――不思議と、足取りは重かった。

第十五話 親爺の真意。

先にリビングに戻った親爺を追う。親爺はリビングの椅子に座った。両肘をテーブルに起き、頭を抱えている。肩が小さく震えていた。ひどく、落胆していた。尋常じゃない。

「…親爺。まじでどうしたんだよ？話してくれ。」

問い掛けても返事はない。頭を抱えたままだ。

「絶対、変だよ。何かあったんだろ？教えてくれよ。」

親爺は頭を抱えたまま答えた。

「……正確には、これから、だ。」

そう言うともた沈黙した。

もういい。自分で考えるよ。状況を分析しろ。

まず携帯の怒号。真意は解らないが、とにかく俺に早く帰ってきてほしい。それは間違いない。

次に、息を整えて何時もどおりに。つまり変化に気付かれたくない。誰に？もちろん母さんしかいない。

そして夕飯。母さんには目立った変化はない。親爺は時計を気にした。《正確には、これから、だ。》つまりこれから何かが起きる。一瞬見せた悲しい目。一瞬なのは何故だ？母さんに気付かれたくない？何故だ？それに母さんに対する親爺のあの白々しい態度は何故だ？

——待て。待てよ。俺の中で小さなピースが形を整え始めた。類似点のないと思われた点達が、線で結ばれ始めた。

親爺の異常な行動は全て、母さんに繋がる。母さんを中心に動き、母さんにひた隠した。

これから起きること。親爺のこれからがわかること。決まってる。一つしかない。

——魂の回収時間だ。

そして、あの一瞬だけ見せた悲しい目。そして、淋しそうな目。その意味——。

——俺の中で雷光が走るような衝撃が走った。信じられない現実を予測してしまった。ま、まさか……。

「親爺！回覧板はどこだ！？」

「…電話の下の棚だ。」

力ない返事。疑心が確信へ近づく。いや、信じるものか。この目で見ると信じたくない。

俺は急いで回覧板を開いた。

『○月×日。回収魂个数。一。場所。東京地区。江戸川河川敷。人間時間。午後八時二十分。』

江戸川河川敷――。高田さんの家までの道程。時計を見る。

八時十五分。

疑心は確信に変わった。だが、信じられない。けど親爺の行動。回覧板。全ては一つの事象を指していた。

「親爺！母さんが死ぬのか！？」

親爺はさらに頭を抱え込む。テーブルに頭を置いた。

「……そうだ。」

思考が止まった。

第十六話 必然への抗い。

何だよ。

急に。

母さんが、死ぬ？意味が、解らない。理解、できない。したくない。あんなに元気だったのに？死ぬわけがないよ。

「はははっ。親爺。質が悪いよ。笑えない。」

信じたくない俺は、馬鹿みたいな事を言った。

「これが母さんの必然なんだ。受け入れろ。」

――プチッ。

「ふざけんなよ！意味がわからねえよ！なんで母さんが死ななきやならないんだよ！それに何だよ！わかってるなら助けに行けよ！親爺は平気なのかよっ！！」

俺は叫んだ。心の底から叫び、親爺を罵倒した。逃れられない真実から逃げるように。

「……平気だと？」

親爺が頭を抱えるのを止めて俺を見た。鋭く、鈍い眼光だ。背筋に冷たい汗が流れる。また俺は威圧された。先程よりも強く。この感覚。親爺は微小ながら、死神の能力を解放した。親爺は立ち上がった。俺の胸ぐらを掴んだ。軽々と俺は持ち上げられた。

「父さんはな。この現実世界で愛している者が二人いる。一人はお前だ。もう一人は母さん。その母さんが死ぬ。……平気な訳があるかっ!!」

怖かった。親爺を怖いと思った。親爺の想いが、覚悟が、俺に伝わった。だが、止まらない。母さんを失うのはもっと怖い。親爺に放り投げられて壁にぶつかった。背中が痛い。だけど心はもっと痛い。

「だったら一緒に助けに行こうよ! 能力使えば一分で河川敷だよ!」

「だめだ。お前は世界が崩壊してもいいのか? 雄司君や美貴ちゃんを巻き込んでもいいのか?」

もう、駄目だ。頭が、回らない。不自由すぎる選択肢だ。母さんと他の人間達を秤にかけろって? 答えなんかでるわけがない。

俺は赤子のように頭を丸めた。そして呻いた。何も考えられない。考えたくない。答えなんかないし。母さんを救えない。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だー！！

「純。来るか？」

顔を上げると親爺が服を整えていた。黒の革のスーツだ。何処へ行くんだよ？声は出ないが、目で訴えた。

「母さんの魂を回収に行くぞ。」

嫌だってば。母さんは死なないよ。魂は回収しない。

「すまない。辛過ぎるよな。父さんも冷静じゃなくなっているんだ。」

親爺はネクタイを締めた。真紅の紅いネクタイだった。親爺は膝をつき、俺の頭に手をやった。親爺の目を見た。穏やかな優しい瞳。幼い頃から見続けた優しい瞳だった。

「純。母さんに最後の別れを告げに行く。お前は別れを告げなくていいのか？」

俺は首を横に振った。何回も。子供だった。

「なら、一緒に行こう。母さんも、きっと待っているからな。」

俺は親爺に抱え上げられた。親爺は玄関を開け、夜空に向って飛んだ。

第十七話 母さんの死。

一跳びで数百メートル進んだ。俺は親爺の腕の中にいた。思考は未だに働かない。情けない。

「……親爺。降ろしてくれ。自分で跳ぶ。」

母さんの死を受け入れた訳じゃない。死を理解した訳じゃない。だけど、こんな情けない姿を母さんに見せられない。せめて自分の足で立ちたい。

約一分後。河川敷に辿り着いた。俺達は電柱の上に立った。母さんは何処だ。感知能力が働かない。俺の思考はまだ働かない。助けを求め、親爺を見る。すでに親爺は神経を集中している。魂の感知に入った。

「あそこだ。」

親爺が指した場所。

土手側の道。

街灯の届かない暗い道だ。

俺は瞳を死神の瞳に変える。

見えた。

「母さーんっ!!」

俺は一飛びで現場に跳んだ。着地。土煙が舞う。その数歩先に母さんが仰向けで倒れていた。

「じゅ、じゅん？」

消え入りそうな声だった。母さんを抱える。何故だ。何故、倒れている。母さんの全身を見る。腹部に数ヶ所。刺し傷があった。完全に内蔵をやられている。これでは…もう…。くそ。くそっ!! 誰だ! 誰の仕業だ!?

「変態にやられちゃったわ…で、でも。犯人、を、殴ったのよ。」

母さんの口から赤い血が流れている。鼻からも流れていた。それでも母さんは必死に笑顔を作っていた。俺は母さんの手を握り続けた。震えが止まらない。

「ミ、ミラー、ク…。」

母さんは誰かを呼んで、誰かを探していた。

「いっこだよ。」

親爺が母さんに寄り添った。親爺は笑顔だった。

「な、なんか。変、だと思ったのよね。」

「すまない。」

「で、でも。いいいわ。約束、守ってくれた…」

親爺も母さんの手を握った。固く握り締めた。

母さんはそれでも笑顔だった。時々、咳き込み、血を吐いていた。

「出会った頃と、同じ…」

母さんが親爺のスーツを見て言った。

「か、か、っこいいわ。」

親爺も震えていた。

「君枝。君は素晴らしい女性だ。君に出会えて、人間の素晴らしさを知った。ありがとう。」

君枝。母さんの名前だ。

母さん。もう目が見えないのか。親爺を見ていない。

「ミ、ラーク。じゅ、んを、よろ…しくね。」

それでも母さんは笑顔を作ろうとしていた。

「じゅ…ん？」

母さんの手を握っていた。しかし、母さんは俺を探している。感覚も消えかかっていた。

「ここだよ！側にいるよ！」

「こ、れが。母さ、んの運命なの。う、受け入れて、」

俺首を横に振った。何回も。嫌だよ、母さん。死なないでくれ。

「純。目を背けるな。母さんの最期の言葉だ。しっかり聞け。」

親爺の言う通りだった。母さんの体から青白い煙が出かけている。魂が今にも肉から離れそうだ。もう助からない。

母さんの吐息は今にも消えそうだった。目の焦点は合わず、唇は小刻みに震えていた。けれども母さんは何かを言おうとしていた。必死に。母さんは振り絞る様に言った。

「……さ、いごに、ふたりに、会えてよかった、わ、ふたりとも、だい、すき、よ、」

握った手に力が消えた。母さんの笑顔だけが残った。

第十八話 死神は涙を流さない。

母さん。

母さん。

母さん？

おかしいな。母さんが動かないよ？勘弁してくれよ。これだけ揺らしても何の反応もないよ？

母さん？

母さん？？

「純。もういい。もういいんだ。」

親爺が俺の肩に手をやった。無理だよ。受け入れられない。生き返らせないかな？もう母さん笑わないかな？また意地悪な事言ってくれないかな？

——バチン！！

頬に強烈な刺激を受けた。刺激は親爺のビンタだった。親爺は俺を抱き寄せた。何度も頭を撫でた。

「純。母さんを安らかに逝かせてやろう。魂を回収してあげような。」

そう言うのと、親爺は黒革のスーツから鎌を取り出した。母さんの肉からは、青白い煙を支えに真っ赤な魂が浮いていた。親爺は深く、深く、深呼吸をした。

「君枝。願いを叶えてくれてありがとう。純のことはまかせてくれ。」

そう言うのと鎌を振り上げた。

「愛してるよ。」

青白い煙から真っ赤な魂が刈り取られた。

魂は空へと昇って逝った。俺は母さんの魂を、天に昇るまで見続けた。見えなくなっても、見続けた。

——頬に何かが伝った。液体だ。何だ、これは。今まで経験したことがない。手で拭ってみた。指先に液体が着いた。拭っても、拭っ

ても、止まらずに流れていた。水源は何処だ？頬より上だ。拭い続ける。目に至った。

——これは、涙か。涙だ。俺は、泣いていた。止まらない。涙が止まらなかった。拭けども、拭けども、溢れ、流れた。

「純。」

親爺を見た。涙でよく見えない。けど母さんを抱き寄せているのはわかった。母さんを強く抱き締めた。

「父さんは死神だ。哀の感情がない。死を司る神には、涙腺など必要ない。だから純みたいにな、涙が流れることはないんだ。」

親爺は小刻みに震えている。けど笑顔だった。俺に微笑みかけていた。

「純の涙は、人間の、母さんの涙だよ。」

完全に親爺が見えなくなった。何故ならば、涙がさらに溢れてきたからだ。目は涙で一杯になっていた。

——この涙は、母さんの涙。

止まれ。止まらない。止まれ。止まる訳がない。とめどなく涙が溢れた。溢れるな。母さんの涙。母さんがくれた涙。零したくない。母さんがくれた涙を吐き出したくない。留まれ。俺の体から出ないでくれ。母さんを体から離したくないんだ。

止まれ。

止まらない。

止まれ。

止まらなかった。

——死神は涙を流さない。

俺は死神に憧れた。

第十九話 暴走と、いつか見た男。

泣き暮れた。涙は枯れなかった。枯渴を忘れた涙腺は止まる事を否定し続けた。泣き続けた。

母さんを失った。圧倒的な喪失感。絶望的な虚無感が俺を覆い尽くした。

だが――。ふと、俺の心の中で、別の感情が目を醒ました。静かに、だが確実にその感情に火が灯り始めた。胸に熱さを覚える。やがて火は炎へ。胸が燃えている。心に灼熱を感じた。その感情は噴火寸前の溶岩の様に、俺の中で暴れ出した。巨大化したその感情は、悲壮と虚無を飲み込みさらに増大される。この感情は何だ？知っている。俺は知っている。

――これは怒りだ。母さんを殺した犯人を許さない。母さんを奪った犯人を許さない。

殺してやる！！！！

感情が弾けた。止まらない。従え。この怒りに従え！！

俺は死神の能力を解放した。全身を強固な筋肉が覆う。五感が絶対的な敏感さに変貌を遂げた。何だ、この感覚は。体の隅々に絶対的な力がほとばしる。経験した事がない、強大かつ洗練された感覚が備わった。まずは嗅覚――。母さんの血の臭いを辿れ。まだ遠くない。次に足の筋肉――。跳べ。いや、翔べ。舞うんだ。

「純！止めろ！餌を私的に刈れば、世界は崩壊するぞ！」

刹那に親爺の声が聞こえた。その刹那を越えて、俺は夜空に舞っていた。

すでに遠くに親爺が能力を解放した感覚を感じた。俺を追っている。だが、俺の速度に追い付けない。距離をどんどん引き離している。

一瞬にして母さんの臭いに近づいた。

地を見ると、中年の男が歩いていた。禿上がった頭。醜い脂肪。腐った卵の臭いを放つ汗。手には血のついた包丁。

こいつか。間違いない。こんな糞野郎に母さんは……！！

――殺してやらあつ！！

俺は全力で能力を解放した。犯人を目指し、天より降下を開始した。右手に全ての力を集約させる。右手は筋肉の硬度を越え、鋼鉄の硬

度と変貌した。振り上げる。首を目がける。

「そこまでです。」

遠くで声が聞こえた。記憶の片隅に覚えがある声だ。それと同時に宇宙で全身の自由を失った。体に鞭の様な物が巻き付いている。俺はまた空に昇った。鞭の力だった。犯人から数百メートル引き離されて、地面に叩きつけられた。

「君はそれでも死神ですか？」

声を近くに感じた。倒れたまま、声の主を見る。黒髪の長髪。一本に結わかれ朱色の帯で止めている。長身細身。鮮やかすぎる紺色のスーツ。何処かで見た男だ。関係ない。犯人を殺せ――。俺の全細胞が唸っていた。

「てめえ！！邪魔するんじゃない！！」

俺は吠えた。鞭をぶち破れ。全身を鋼鉄に変化しろ。ぶち破れ！！

男はクスツ、と吐息と共に美麗な笑みを浮かべた。

「無駄です。いくら天才と呼ばれようと、君はまだ若い。私には及ばない。」

言う通りだった。鞭の力は巨大だった。切れない。

「純――！！」

親爺の声だった。母さんの感覚もする。母さんの亡骸を抱いていた。

親爺は土煙を舞わし俺の近くに着地した。

「躑がなっていないせんね。」

親爺は声の主に膝まづいた。ひれ伏している。

「申し訳御座いません。カミュ様自ら、馳せ参じて頂くとは。お恥
ずかしい限りです。」

カミュと呼ばれるその男は長髪を風になびかせた。微笑んだ。違う。
妖しい。人間の筈はない。何者だ。

「君には紹介がまだでしたね。ジュミラル・カミュです。大王様
の親衛隊長ですよ。」

カミュは鬱陶しいほどに、妖艶に微笑んだ。

第二十話 ジュミラール・カミュ。

俺は鞭の力で、地べたに座らされた。理解できないことに鞭はカミュの意志で自在に操られていた。全身の自由はカミュに奪われたままだ。

「純君といいましたか。天才と思いましたが、君には失望させられましたよ。」

俺は暴れ狂った。無駄な行為だった。識っていた。だが、止まらなかった。

「止める。純。美貴ちゃんと雄司君を思い出せ。二人を苦しめたいのか？」

二人の笑顔が脳裏を過った。意志が揺らいだ。

「犯人はいずれ捕まる。あんな奴を殺して、二人を苦しめて何の得になる？」

俺は抵抗を止めた。親爺の言う事は正論だ。

すると全身を脱力感が襲った。体の自由が全く効かない。指一本動かせない。気力も霧散していった。巨大な能力を使った反動なのか？

「カミュ様。ご迷惑を。」

親爺が深く頭を下げた。それを見てカミュが鞭を解いた。不思議な事にカミュの手元に自動で伸縮し戻った。

「いいんです。私は貴男を疑った。私は貴男が人間を救うと考えた。その償いならば安いものです。」

「いえ。私の力では息子を止められなかった。まさか、ここまでとは……。認識不足でした。結果、カミュ様なしでは恐ろしい大罪を招いたかもしれません。私の贓不足です。」

「此処に私が存在したのも《時》の一部だったということでしょう。貴男に罪はありません。息子さんの力には私も驚かされましたよ。しかし、貴男のその姿を見て、私の杞憂に過ぎなかったのを確信しましたよ。その姿、十八年経とうと色褪せる事はないですね。」

カミュは親爺の黒革のスーツを見て言った。

「純君。君は人間との混血だが、死神でもあるのですよ。弁えなさい。」

俺はカミュを見る事はなかった。頭は冷え、自分の犯そうとしていた行いへの罪悪感があったが、こいつの喋り、佇まい、存在が気に喰わなかった。

「若い頃の貴男に瓜二つですね。」

腐った俺を見てカミュが言った。俺は腐っていた。母さんを救いたかった。親爺に止められた。犯人を殺したかった。カミュに止められた。俺は何もできない子供だった。無力だった。意志も萎えた。腐った俺にカミュは目線を合わせる様に膝を着いた。

鮮やかな紺色のスーツが目にも痛い。黒々とした死神の瞳で俺を見ていた。

「《時》は誰しにも平等です。我々の使命は《時》に従い、執り行う。偉大な任なのです。」

はあ？何を言ってるんだ、こいつは。《時》？俺には関係ないね。

カミュは立ち上がった。夜風に流された長髪が鬱陶しく流れた。

「ミラーク。哀悼の意を捧げます。《時》は常に貴男と共に。」

親爺はまた頭を下げた。

「勿体無いお言葉です。」

カミュは妖艶な笑みを浮かべると、全身が次第に透けていった。完全に透明になり、気配も消えた。完

いつか、見た男だった。記憶は甦らなかった。

第二十一話 人間を愛した死神の物語。

カミュがいなくなっても、俺は動けなかった。全身が言う事を聞かない事も理由の一つだが、何よりも動く気力が起きないのが原因だった。

「純。すまなかったな。」

「何で、親爺が謝るんだよ。謝るのは俺の方さ。」

「二週間前に回覧板が更新されてな。元来、回収する魂に名前は乗っていない。けど父さんは母さんが今日死ぬのをその時知ったんだ。」

——そうだ。何故、親爺は母さんが死ぬのを知っていた？ 回覧板に名前は書かれない筈だ。こんな大きな矛盾に気が付かなかった。俺はかなり混乱していたんだな。

「大王様自ら、回覧板に父さん宛に手紙を同封してたんだよ。それで知ったんだ。」

死神大王。一度だけ面識がある。あの変な喋り方する爺さんだろ？ そういえばカミュらしき人物にも会っていた。

「父さんは母さんを愛した時点で覚悟をしていた。けど純には母さんの死を受け入れられるとは思えなくてな。こんな形になってしまった。すまない。」

「……いいんだ。そんな前に俺が知っていたら、どうにかして母さ

んを救おうとした。そして俺自身の偽善で苦しむ羽目になってだろうし。親爺は悪くないよ。」

親爺は小さく俺に微笑んだ。親爺は、母さんの亡骸の傍らにいた。黒革のスーツを脱ぎ、母さんにかけていた。黒革のスーツは月の光を反射して、その一部を光らせていた。

「このスーツはな。父さんが魂を回収する時に必ず着る、一張羅なんだ。」

親爺は白いワイシャツにかかる真紅のネクタイを緩めて、母さんの横に座った。そして母さんの髪を優しく撫でた。

「何年も魂を回収して、Aクラスに昇進した直後だ。浮かれて油断していたんだろうな。回収の現場を人間に見られてしまった。それが母さんだった。母さんと出会った時もこのスーツでな。」

親爺は母さんの頬に手をやる。親爺は微笑みかけた。母さんの顔は色を無くしていたが、表情は最期の笑顔のままだ。まるで、二人は微笑みあっているようだった。

「驚いたよ。普通の人間なら恐怖して叫ぶだろう？母さんは違った。母さんは興味津々に俺に話し掛けてきたよ。」

親爺はさらに微笑んだ。目は遠くを見ていた。母さんと出会った時を思い出しているように見えた。

「今の鎌は何？何かを切っていたように見えたけど何？貴男は何者なの？ってね。父さんは思わず笑ってしまったよ。死体を前にして何だ、この人間はってね。母さんに興味が沸いて、父さんは秘密を

約束するなら教えてやるって言ったよ。」

親爺は昔を懐かしみ、笑った。だが、笑顔の中に隠しきれない悲壮が詰まっているのを俺は気が付いていた。

「あとはもう、母さんのペースさ。母さんは秘密を逆手にとって何度も父さんを誘った。」

母さんらしいや。どこか、人とは違う、肝っ玉が座ってたからな。

「母さんに恋するのに時間は必要なかったよ。始めは戸惑ったさ。恋という感情なんて知らなかったからな。父さんは母さんに告白したよ。だけど死神だからな。何て言えばいいか、わからなかったよ。だから死神らしく、父さんができることだけを伝えたんだ。」

そうだ。死神が人に恋をするなんて前例がない。どうやって口説く？ 死神史上、初めての告白。興味が湧いてきた。

「貴女の魂を回収する時が訪れるまで、俺の側にいてくれないかってね。」

——プツ。

「ははは！ 何だよ、それ！」

笑ってしまった。不器用な告白だな。死神らしいっていえばそこまですでに、滑稽すぎるよ。俺は腹の底から笑い転げてしまった。絶望感や虚無感は、母さんと親爺の馴れ初めに影を潜めた。

「母さんも同じ事言ってたよ。それに今はプロポーズ？って何回も聞いてきた。」

母さんが嬉しそうに悪戯顔で親爺をからかうのが容易に想像できた。

「そして母さんはこう言ったよ。」

親爺は今までにない、穏やかな笑みを浮かべた。きつとこの笑顔は母さんにしか見せない笑顔だ。

『なら、私の魂は貴男が回収して下さい。』

母さんの声が聞こえた気がした。声は親爺だけど、母さんの顔が浮かぶ言葉だった。これが母さんが言ってた、約束、か。約束は果たせたんだ。少しだけ、ほんの少しだけ、母さんが救われた気がした。

「父さんは母さんを愛して幸せだった。死神連中は父さんを馬鹿にしたがな。父さんは母さんを愛した事を誇りに思っていたよ。」

親爺は母さんの手を握った。冷たくなり、固まった手を親爺の手が包んだ。

「純。そろそろ家に帰ろう。母さんと一緒に。」

俺は小さく頷いた。虚脱感が包む全身を何とか動かして、母さんと親爺で家路を歩んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9919a/>

死神より人間になりたい。

2010年11月24日16時33分発行